

僕の彼女

安部 心菜

「ねえ、聞いている。」

それが彼女の口癖だった。

今、僕たちは夜景が見えるレストランで食事をしている。僕が彼女を誘って、ここに来たのだ。告白をするために。

「ご飯も美味しいし、景色も素敵ね。」

と、柔らかな笑みを浮かべて言った。僕はその笑顔に長い間見とれていた。

デートも終盤にさしかかった時、僕はついに告白した。

「別れよう。」

と。

彼女は僕の急な発言を理解できていないのか、しばらく沈黙していた。そして、

「そっか、分かった。」

と潤んだ瞳で見つめ、静かに言った。その言葉を聞いた後、僕はその場から立ち去った。

それから二日後、彼女は事故で亡くなった。

友人からその報告を聞き、体が震えた。そして、すぐにある家へと向かった。

「夏子、僕と結婚しよう。」

僕は二股をしていた。

『亡くなった彼女』の話はしようもなく、聞いていないことが多々あった。しかし、夏子はそうではなかった。

「本当に。嬉しい。」

と満面の笑みとともに、そう答えた。そして

「そうだ。せっかく来てくれたし、一緒に夕食でもどう。」

とも言ってくれた。僕はその優しさに甘えて夕食をいただくことにした。

「今日は夜空が綺麗ね。」

夕食を運んでくるなりそう言った。その途端夏子の顔は歪み、何かに取り憑かれたのか、喪神した。

夏子の顔はどんどん何者かによって浸食されていく。

僕は恐怖からか、思わず目を閉じた。

しばらくして、恐る恐る目を開けると、そこには死んだはずの『彼女』の姿があった。

彼女は何か口ずさんだ。

からん。冷やかな金属音が部屋に響き渡った。

暗い影は僕に近づき、囁いた。

「ねえ、聞いている。」